



2018.12
vol.213



大谷という《人生の時》を生きる 学校長 飯山 等

先頃ある先生が、1984年度の最初の機関誌『大谷』(Otaningの前身)を持ってきて一言、「先生、急ぎ過ぎてますよ」と笑いながら言葉をかけてくれました。そこには34年前の、専任として勤め始めたときの私がありました。その号の新任紹介の欄で私は、最初に谷川俊太郎さんの詩、《こんなに急いでいいのだろうか／田植えする人々の上を／時速二百キロで通りすぎ／私には彼らの手が見えない／心を思いやる暇がない／(だから手にも心にも形容詞がつかない)／この速度は速すぎて間が抜けている／苦しみも怒りも不公平も絶望も／すべて流れてゆく風景》を掲げて、「生徒が、「流れてゆく風景」になったとき、それは、教師の死であろう。決して新幹線教師であってはならない。つねに生徒と共に「田植えする人」で在り続けたい」と決意・抱負を書いています。そんなことを書いたとはすっかり忘れていた私には、初心忘るべからずの古訓が身に沁みますし、且つ若気のなせるというしかない気負いを多分に含んだ言葉がこそばゆい限りです。と同時にそのときの気持ちを素直に言えば、34年前の私を、現在の間近に感じて嬉しく思ったことも事実です。随分と甘い自分への見積もりだと言われるかも知れませんが、失ってはいない初心に再会させてもらい、あらためて大切にすべき姿勢として自らに確かめられたことでした。

12月に入り高校2年生は研修旅行に。冊子の扉の言葉を求められて、何十年ぶりかで実家の書架で埃をかぶっていた古いアルバムの一冊を開いてみました。それは私にとって最後の“自分のアルバム”となっている高校時代のものです。そこに大きくページを占めているのは高校2年生の時の修学旅行です。40数枚のスナップ写真に添えて、ペー

ジいっぱい気恥ずかしいばかりの若い詞書きが溢れています。

今から51年前の1967年10月21日から24日までの3泊4日、宿泊地は四国の高松市、湯田町(尾道の近くの温泉場)、広島市。新幹線は3年前の1964年10月1日に東京駅-新大阪駅間が開通したばかりでしたから、在来線、当時は国鉄と言っていた列車や、瀬戸内海を渡る船を使っただけの旅でした。岐阜駅発5時45分という早い時刻の出発でしたが、車内で早くも友人とトランプに興じています。高松に泊まって「瀬戸内の朝を味わう。海の見える朝、なんとすてきだ」、湯田では「温泉場であるだけに夜の外出でもすごく町は賑やかだった、土産物店のたくさんあることにびっくりした」と書いていて、岐阜県の西部を流れる揖斐川が深い谷を刻んだ、山あいの小さな集落で中学卒業まで過ごした私の初な心に、今も懐かしく共振します。秋芳洞を訪れて「自然の仕業の偉大さ、不思議さに目を見張った」とまっすぐな感動を記し、広島の宮島の旅館での写真は「修学旅行最後の夜、クラスみんなでゲームをして楽しむ」と肩寄せ合った笑みが溢れています。

そして翌日訪れた原爆ドームの写真には、「原爆の恐ろしさ、悲惨さをありのままに残して、二度とこのようなことが世界でなされないように、静かに悲しく訴えかけているような様子は、誰も心の強く揺り動かすであろう」と書き、原爆ドームを背景にしたクラス集合写真は皆が厳しい表情で、私も口を真一文字に結んでいます。アルバムはこの4日間が私にとってたいせつな《人生の時》となったことを証しています。

半世紀後、今の私の年齢になったとき、皆さんはどのような世界を、どのような私として生きているでしょうか。そのとき、この大谷は皆さんの中にどのように息づき、何を証しているのでしょうか。